



研究集録34

神戸大学発達科学部附属特別支援学校研究推進委員会

(Citation)

研究集録, 34:0-10

(Issue Date)

2008-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009935>



2007年度 研究・実践

障害を見つめ、発達にそくし、生活実態にねざした
科学的な障害児教育実践の創造

2007年度研究集録の発行に当たって

学校長 廣 木 克 行

2007年度の『研究集録』をお届けします。周知のように、今回の研究集録は校名が特別支援学校に変わった年の実践と研究を集約したものです。それは特別支援教育元年の実践とも言えますが、本校の教育が養護学校時代とは異なる新しいものになったわけではありません。本校の場合の新しさと言えば、長年にわたる障害児教育の経験を総括し、既に「コミュニケーション的関係をひらく教育」として捉え直し著書にした自分たちの実践を、校名が変わったこの時を契機にして、さらに発展させたいという意欲にあったことができます。

既にご存知の方も多いのですが、本校の教育の背骨ともなったコミュニケーション的関係の創造という課題は、子ども同士の人間関係を育てるスキルを取り立てて指導することではありません。それは文化的・芸術的な作品の教材化や自治的・生産的活動のプロセスの教育的編成を通して、子ども同士の間に多様な豊かな関係を創り出し、同時に子どもと教師の間に新たな出会いや気づきの機会を創り出すことを意味しています。さらにそれは教師と保護者の間に共感と信頼の関係を築くことを通して、子どもと教師の関係を一層深めることをも意味しています。

自分たちの実践をそのように捉えた上で、2007年度のテーマは、前年度のものを引き継いで「障害を見つめ、発達に即し、生活実態に根ざした科学的な障害児教育実践の創造」としました。それは前年度の研究内容をさらに深めるためだけではなく、障害児教育において新たな対象に加えられたいわゆる「軽度発達障害」の児童生徒の障害と発達について理解を深め、関係作りの視点と方法を学び取るという、新しい課題への挑戦という意味を込めて合意されたものでした。

研究の体制も基本的には昨年度までの体制を継承して、テーマ別研と学部研という2つの研究組織にすべての教員が参加して取り組みました。2007年度は隔年に開催される研究協議会の年でしたが、テーマ別研は学部ごとの研究に傾きがちな意識を常に全校的なものにする上で重要な役割を果たしました。テーマ別研では「ことば・国語」「集団・自治」「もの作りと自分作り」そして「からだ・性」の4つのグループに分かれた研究を行いました。年に数回という限られた機会であったにもかかわらず、学部を越えて教育を論議する場を持つことで、全学部が共通の認識に立って全校の研究テーマを追求することができました。

各学部における研究の詳細については是非本文を読んでいただきたいのですが、ここでは年度末の全校研究会で私が学んだ要点を簡潔に記しておきます。まず小学部では「コミュニケーションの力を育む教育実践」をテーマとして物語の教材化を追求してきました。そこでは「分かること」と「楽しさ」を不可分のことと捉え、子どもの表現を介して楽しさが共有できるのではないかと考えて、動作を伴った言葉を選び出して伝えながら表現を引き出し、コミュニケーション的関係の創造を模索したことができます。

中学部では「学び合い、育ち合う集団作り」をテーマとして、例えば本校入学の経緯を異にする子どもの間にある違和感や摩擦を克服する実践を展開してきました。一般の小学校から入学してきた子どもたちの中には、周囲からの偏見と無理解によって心に傷を持たされ、攻撃的行動や自己否定的な言動を示す子どもがいます。その子どもが集団の中で人と関われるようになるには、「自己肯定感」の獲得が不可欠であるという視点に立ち、遊びや自主活動を通してその実現を追求してきました。

そして高等部では「コミュニケーション・自治の視点と自分づくり」をテーマとして、一人ひとりの子どもの願いや思いを要求として表現することと、自分の要求が皆のしたいこと=要求になることを経験させ、それを実現してゆくプロセスを追求しています。そのためには自分の願いへの気づきを妨げている自信のなさや自己否定感を自治活動や生産活動を通して丁寧に解きほぐし、自分の願いを掘り下げさせながら、それを自分なりの方法で表現して実現することの喜びを体験させる実践が報告されました。

このような実践と研究に取り組んだ2007年度は、私個人にとっては校長最後の年でもありました。それは本校の教師たちと保護者の皆さんから嘗てないほど密度の濃い学びをさせていただいた1年だったと言えます。とくに教師と保護者の相互理解と信頼関係が子どもたちの豊かな活動を生み出す土壌であることを確信できたこと、そしてその信頼関係作りの中に私自身も参加できたことは非常に得難い経験となりました。ここに感謝の気持ちを記するとともに、本校が真の障害児教育を追求する砦であり続けて欲しいという願いをこめて、巻頭の言葉とさせて戴きます。

も く じ

1. はじめに	学校長 廣木 克行 ...	1
目次		2
2. 2007年度研究推進活動の実際とまとめ	松永 芳博 ...	4
3. 各学部の教育と研究の実際とまとめ		
[小学部] 小学部教育の概要	西堂 直子 ...	11
小学部研究の実際とまとめ	佐藤 知子 ...	13
実践報告		
・ことば・かず・あそびAグループ	西堂 直子 ...	21
・ことば・かず・あそびBグループ	山口 和彦 ...	32
・ことば・かず・あそびCグループ	佐藤 知子 ...	39
・1組えがく・つくる「素材としっかり関わって」	岡宗 文華 ...	51
・2組学級活動「みんななかよし・ともだちだ！」	岡田 祐子 ...	55
・体育「運動会演技『めざせ ゴール!』の取り組み」	本田 旭 ...	57
・自立活動『からだ』		
「サーキット運動・なわで遊ぼう・ブランコ運動について」	衣笠 義博 ...	60
教育課程編成上の諸課題	西堂 直子 ...	64
附属明石小学校との交流	西堂 直子 ...	67
[中学部] 中学部教育の概要	松永 芳博 ...	69
中学部研究の実際とまとめ	杉本 憲章 ...	71
実践報告		
・1組学級活動「中学部1組の学級づくり～一年間の取り組みを通して」	殿垣 亮子 ...	77
・2組学級活動「Cafe ワン☆ピース開店の取り組みまで		
そして、その取り組みから見たこと」	澤田 圭司 ...	89
・3組学級活動「みんなの教室、3組～お茶の間をつくろう！」	立中 泰輔 ...	98
・国語・数学・基礎Bグループ「やってみよう、考えてみよう」	杉本 憲章 ...	104
・国語・数学・基礎Dグループ「大切ないのち」	井上 さみ ...	113
・音楽「一年の取り組みを振り返って」	中川 晶雄 ...	118
教育課程編成上の諸課題	松永 芳博 ...	121
[高等部] 高等部教育の概要	大宮とも子 ...	126
高等部研究の実際とまとめ	大谷 瑞枝 ...	128
実践報告		
・生産学習の取り組み ～働く仲間集団としてどう育ったか～		
「目的意識性の広がり」に着眼して		
◇生産Ⅰ班『農業』	長谷川 進 ...	139
◇生産Ⅱ班『食品加工』	柴田真砂代 ...	144
◇生産Ⅲ班『陶工』	栗田良之助 ...	150
◇生産Ⅳ班『木工』	黒川 陽司 ...	155

・3組学級活動「行動を節目に育ち合う集団づくり」	大竹由美、岩崎正臣	161
・美術Bグループ「一年間の取り組み」	栗田良之助	166
・美術Cグループ「一年間の取り組み」	黒川 陽司	169
・1. 2組合同学級活動「なかまと作り上げる表現の楽しみ 劇『千夜一夜物語～ふしぎなランプ』の取り組みから	柴田真砂代	174
教育課程編成上の諸課題	大宮とも子	178
木の根学園との懇談会についての報告	大谷 瑞枝	186
三木養護学校との交流についての報告	大宮とも子	187
4. その他の実践報告		
・「保健」実践報告「からだ 発見！－性教育の第一歩－」	荻野 圭子	189
・障害幼児教室（たんぽぽ教室）のとりくみ	西堂 直子	193
5. テーマ別研究会の報告		
「ことば・国語」研究会	佐藤 知子	197
「集団」研究会	杉本 憲章	200
「ものづくりと自分づくり」研究会	大宮とも子	203
「性・からだ」研究会	荻野 圭子	207
6. 第18回障害児教育研究協議会報告		
・実施要項		209
・全体会報告	松永 芳博	212
・講演「特別支援教育に期待するもの～臨床教育学の視点から～」報告 廣木 克行（学校長）		216
・各分科会報告		
◇第1分科会	佐藤 知子	227
◇第2分科会	杉本 憲章	230
◇第3分科会	大谷 瑞枝	232
◇特別分科会	松永 芳博	233
・研究協議会のまとめ	井澤 孝典	234
7. 校務部活動、委員会活動報告		
教務部報告「障害児臨床実習の実際と諸課題」	山本 君恵	235
指導部報告「2007年度学校行事の取り組みについて」	衣笠 義博	242
総務情報部報告		
「総務情報部の取り組みについて～情報ネットワークの管理運営～」	三木 一平	247
進路指導委員会報告「2007年度 進路指導の現状と課題」	空井 宏司	253
保健委員会報告	荻野 圭子	257
入学選考委員会報告「2007年度 入学選考の実施と課題」	井澤 孝典	258
8. おわりに		
	松永 芳博	261

2007年度 研究実践活動の概要

研究推進委員会

研究主題

障害をみつめ、発達にそくし、生活実態にねざした
科学的な障害児教育実践の創造

1. 研究推進の基本的な方針について

(1) 今年度の研究推進活動の方針について

教育基本法の改定がなされ、憲法も、改正の手続き法ともいえる国民投票法が制定されることになり、改正（改悪）の動きが非常に強まっている。その流れの中で、教育3法案（学校教育法改定案、教員免許法等改定案、地方教育行政法改定案）の改定の動きが強まっている。その3法案が成立した結果、（副校長、主幹教諭、指導教諭）等の設定がなされることになり、また教員免許の更新制の導入がなされ、教育委員会への文部科学省が「指示、是正の要求」ができる等の関与が強まる等々という現状となった。これらの動きは、ややもすると国民を主人公にすべき教育が国家を中心とする教育へと流れが強められようとし、現実には強められたことを示しているのではないかと心配も持ってしまうという状況である。教育を取り巻く問題が非常に多くなり教育の荒廃が叫ばれている現状であるが、その中で、教育の管理統制を強めることでそれに対応しようとする流れが次々と作られてきているのではという危惧も感じる。それらは、子どもたちに豊かな教育を保障し実現していくうえでは逆効果になる可能性を持っているのではないかとも思われる流れであり、私たちの思いと反する動きであるように思われる。そんな現状だからこそ、本来あるべき「人格の形成をめざす」という教育の意味、価値をあらためて示していく必要性が増しているように考えられる。まさしく「人格の形成をめざす」本校の教育を守り、それを発展させていく必要性がさらに増しているのではないだろうか。そして「人格の形成」を促すうえで、出版本で示したように、コミュニケーションの力を培っていくこと、なかでも「コミュニケーション的理性」を育てることの重要性がさらに大きく増しているように考える。なぜなら、現在の教育の問題は、コミュニケーションの力の不十分さ、コミュニケーション的理性の不十分さ、コミュニケーション的関係を結ぶことの不十分さが大きな要因とも考えられるからである。その不十分さは、児童生徒同士の関係とともに、児童生徒と教師との関係、あるいは教師同士の関係についても痛感されることであ

る。そんな中、「集団」や「自治」の視点の重要性についても同様に大きくなっている。

上記の流れとも呼応するかのように、「障害児教育」も「特別支援教育」へと大幅な転換がなされることになった。そんな特別支援教育の流れの中で、本校も今年度より「特別支援学校」という名称でスタートをきった。特別支援教育は、一人ひとりに合った教育を実現し保障するという、いわば正しく当然ともいえる理念を持ちながら、その理念を達成するにはたくさんの矛盾や問題を抱えてしまっているというのも実情である。教育基本法が改定された等々の現状の中では、その理念は非常に危ういものであると言わざるを得ない。特別支援教育の現状の問題点と課題について、本校では、5つの点（①子どもの捉え方、発達観、障害観にかかわる問題で、個別学習に限りなく近づき、こどもの要求や思いと違った課題設定や、合意と了解よりも対症療法的な課題が優先される危険性があること。②個別の課題が優先されることで「集団」、「集団での指導」が成立しにくくなる可能性があること。③教師の役割と専門性に関わる問題。個々の専門性への要求が強くなり、教師集団という観点が希薄になり、教師がバラバラにされてしまう傾向があること。また特別支援教育コーディネーターをどう位置付け配置するのかという問題。④障害児学校が地域のセンター的な役割が求められることとなるが、支援の内容や体制がまだまだ整っていないという制度上の不備等の問題。⑤教育の危機が進行している小中学校で特別支援教育が位置付くまでの課題。高校、大学での課題が全く触れられていないこと）について指摘している。そんな様々な課題に向き合い対応しながら、その中で本校教育を守り、育てていくこと、そして私たち自身が多くを学び、私たちの実践を外に発信していくこと、発信していくことを通して、共に学び、障害児教育（特別支援教育）の充実をはかっていくことが大切になっている。また本校でも、これまで障害児教育の対象と十分になされていなかった軽度発達障害、LD、ADHD、高機能自閉症等の児童生徒が在籍するようになってきている。そんな児童生徒についての理解、その教育についての理解を深め、適切な教育実践を行っていくことが重要課題になっている。そして、自立支援法の施行でますます厳しく貧しいものとなってしまっている障害児福祉の状況の中で、これからの生活をどう展望していくのか等についても考えてい

く必要が増えてきている。

さらに、大学改革のうねりの中で神戸大学でも様々な大改革がなされ、その中で「附属学校の再編・統合も、私たちの意に反する要素も持ちながら進められている。その中で、附属学校としての本校が、どうこれまでの教育を守り、発展させていくのか、存在意義をどう示していくのか、大学や学部との連携をどう進めていくのか、実に重要な課題ともなっている。大学や学部とコラボレーションし、教育実践研究の充実、豊かな教育実践の創造が望まれている。

以上のような理由から、冒頭の枠内に掲げた研究テーマを設定し、出版本で世間に問うた「コミュニケーション関係がひらく障害児教育の創造」を、さらに目指し、充実させる一年にしたいと考えるものである。私たち自身が学ぶ機会を多く設定し、本校の実践を深め高めていく1年、本校の実践を外にも発信し共に学んでいく1年にしたいと考える。今年は、研究協議会を実施する年であり、11月17日（土）に予定している。その研究協議会に向けての取り組みを充実させ、私たちが、私たちの実践をまとめる機会、それを外に発信する機会、たくさんの障害児教育に携わる人と交流し、共に学び合う機会として、研究協議会を成功裏に実施できるように努力していきたい。研究協議会以外にも、公開研究会を実施し、地域との連携を深める取り組みを充実させていきたい。

【今年度の重点課題】

- ①本校の出版本『コミュニケーション的関係がひらく障害児教育』の内容への理解を進めることをはじめとして、本校教員の教育的力量を高めていくこと。
- ②本校の出版本『コミュニケーション的関係がひらく障害児教育』の内容をはじめとして、本校の実践をまわりに発信していくこと。
 - ・学部研究会、テーマ別研究会、全校研究会の実施と充実。
 - ・研究協議会の実施
 - ※現在の情勢、障害児教育に携わる人の要求を踏まえて、研究協議会の内容作りを進める。
- ③特別支援教育についての学習と吟味。
- ④本校に在籍する軽度発達障害、LD、ADHD、高機能自閉症等の教育実践の創造。
- ⑤発達科学部との連携
 - ※コラボレーション委員会を持ち、研究協議会の内容作りとも、重ね合わせて、共同研究を作り出していけるよう取り組んでいく。

2. 研究推進委員会の任務について

研究推進委員会は、本校の研究推進活動全般を円滑に進め、また指導していく責任を負っている。その構成は、校長、副校長、各学部主事、各学部委員よりなり、委員長は互選で決定する。委員長は、委員会を統括する責任と、対外的には県知養の理事など、研究活動に関して本校を代表する任務を負う。また、今年度も副委員長を置き、副委員長は委員長を補佐して本校の研究活動を推進する任務を負う。学部の委員は、学部研究の推進と同時に全校的に必要な任務を分担して行う。

- ・毎月1回の定例会議を設定し、研究実践活動に関わるすべてのことについて、協議を行う。
- ・「研究推進ニュース」の発行等、広報活動の充実に努め、研究推進に関わるすべての情報を全教員がもてるようにする。
- ・研究出張の円滑な執行を行う。
- ・研究図書等の購入や研究室の整備充実をはかる。

3. 研究推進の具体的内容と方法について

(1) 学部研究会の充実

教育実践を進めていく基盤である「学部研究会」の充実をはかる。

- ①学部ごとに、研究テーマ、研究と実践上の課題を設定する。研究の進め方、内容については、年度当初に各学部で方針を持つようにし、計画性や見通しを持って進めていくようにする。研究推進委員会でも各学部研究会の情報交換をし論議を深めていく。
- ②児童生徒の実態把握を進め、一人ひとりの課題を明らかにしていく。
 - 「教育実践カルテ」の作成と検討、活用の充実をはかる。
 - ・「障害をみつめ、発達にそくし、生活実態にねざした」という観点を大切に作成する。とりわけ、「生活」「集団」「内面」「発達」を「障害」との関連で捉え直す。
 - ・集団で協議することを充実させ、そのことを通して、児童生徒を見つめていく視点を広げ、課題の共通理解、指導の共通理解をはかる。
 - ・日常的教育実践に生かしながら、さらに検討を重ね、課題、指導や働きかけをより明確にしていく。
 - 必要に応じ、発達検査・発達診断を実施し、課題を明らかにしていく際に活用する。
- ③授業実践の力量を高めていく。
 - 毎学期の指導計画の作成

- 毎学期の実践記録の作成
- 授業研究会の実施
- 学習会の設定
- 年度末の研究集録の実践報告の執筆

(2) 全校研究会の充実

全校で学び合う機会、各学部研究会や各テーマ別研究会の内容を確認し合ったり協議し合う機会として、全校研究会を実施する。

また、他の学校からも参加してもらって一緒に学び合う機会として「公開研究会」の実施をめざす。

(3) テーマ別研究会

小中高の教員が混じって（学部をまたがったグループで）学び合う機会として、「テーマ別研究会」を組織し、学部研究会や全校研究会との連関を探りながら、有意義な機会としていく。4つのテーマ別研究会を設定する。

- ①ことば・国語
- ②集団・自治
- ③ものづくりと自分づくり
- ④からだ・性

編成にあたっては、基本的に各教員の希望で行うが、あまりにも人数の少ないテーマがあったり、ある学部の教員が集まってしまう（他の学部の教員がいない）といった場合には、小中高の教員が混じって学び合う機会というテーマ別研究会の主旨を鑑みて、必要最小限の調整を行う。各グループを円滑に有効に運営していくために、研究推進委員が各グループに入るようにする。また、それらのテーマ別研究会は、本校の出版本『コミュニケーション的関係がひらく障害児教育』の内容を確認したり深める場としていきたい。

(4) 研究図書の購入、整備

購入希望をとり、計画的な購入を行い、研究図書の充実をはかる。また、それらがさらに活用できるような手立てを考える。本年度は、定期購読雑誌や新刊図書は、よりその活用をはかるために、教員室に書棚を設け、そこに置く形にする。

(5) 広報活動

研究実践の取り組みをみんなのものとするため、「研究推進ニュース」を発行する。月2あるいは月1位のペースで定期発行をめざす。また、現在の障害児教育の情勢等を捉えて、企画連載ができないか等についても検討を進めたい。

(6) 研究出張

他校の研究や実践を学ぶ機会として、また本校から発信したり交流を深める機会として、できるだけ積極的に参加していく。計画的な研究出張予算の執行をはかる。

(7) 研究集録の発行

今年度の研究と実践をまとめる機会として、また年次記録としても位置付け、「研究集録No.3 4」を発行する。

(8) 対外的な諸課題

①発達科学部との連携

発達科学部とのコラボレーション委員会を早期に持つことを計画し、共同研究を進めることをめざす。

②県知養、近知養、教大協などとの連携

近知養研小学部会の兵庫県の責任校の任務を負う。

(9) 地域との連携

①「障害幼児保育教室（たんぼぼ教室）」の開催

月1回、障害のある幼児の保育を行い、また子育てに不安を抱える保護者への相談活動として、「障害幼児保育教室（たんぼぼ教室）」を実施する。地域のこどもたちの実態を捉え、これからの障害児教育のあり方を探る機会ともしていきたい。

②明石障害児学級担当者会

明石市内障害児学級担当者会（小・中学部）へ参加し、実践や研究についての交流を進める。

③木の根学園との懇談

本校の卒業生が多く在籍し、隣接している施設「木の根学園」の職員の方と、本校高等部の教員との懇談会を継続して夏休み中に持つ。卒業後の生徒の生活の充実をはかると共に、福祉の状況について知る機会、福祉の充実に向けて共通理解を進める場としたい。

④その他

- ・附属明石小学校との交流
- ・三木養護学校との交流

⑤公開研究会

近隣の学校の教員と共に学び合う機会、交流し合う機会、そして本校から発信する機会として、今年度も「公開研究会」を実施する。そのテーマや内容は、本校が学びたい内容であると共に、障害児教育の現状を踏まえて近隣の学校の教員の要求も鑑みて、考えることとする。

4. 今年度の研究推進活動のまとめ

今年度は本校が「養護学校」から「特別支援学校」に

名称を変えた年度であり、それはただ単に名称が変わったというわけではなく障害児教育が大きな転換点に立つという意味をも持っていた。本校も、その変化のうねりの中に立たされたということである。その変化をしっかりと受け止め、吟味し、本校の作り上げてきた教育をどう守っていくのか、どう発展させていくのか、そのことを問われる一年となったように思われる。そんな情勢の中で、本校のさらなる研究実践活動の充実、教育実践活動の充実が一層必要不可欠になっているように考える。そんな状況の中で、今年度実施した研究協議会を大きな節目の機会と考え、今年度の研究実践を進めてきた。

今年度の方針、重点課題に沿って、総括していきたい。

まず、①点目と②点目についてであるが、今年度実施した研究協議会のテーマに『特別支援教育元年コミュニケーション的関係がひらく障害児教育実践』をあげて、研究協議会を実施し、成功裏に終えることができた。研究協議会の総括は別稿に譲るが、その研究協議会を節目にして各学部研究を中心に研究を進めていく中で、コミュニケーション的関係を結ぶことの大切さを再確認し、その努力をしながらそれをもとに教育実践の創造を目指していくことが、真に児童生徒にとっての豊かな教育実践の創造につながることを、学び、共通理解をしていくことができた。また、「生活・集団・内面・発達と障害をとらえなおす」という文言をサブテーマにあげ、「生活」「集団」「内面」「発達」を「障害」との関連でとらえなおすことの必要性を痛感し、その努力を重ねてきた。それは特別支援教育の流れの中で、広汎性発達障害や自閉症スペクトラム等の概念がクローズアップされてきたこと、その「障害」の特性から「生活」「集団」「内面」「発達」といった面に相互に影響し合っていることが非常に多いという事実がより明らかになり、「障害」を「生活」「集団」「内面」「発達」と並列的に捉えるのではなく、根幹をなすとも言えるほど重要なものとして捉え直す必要性を感じたからに他ならない。そんなサブテーマを設定したことから、「障害」を深く理解し捉えること、そして「生活」「集団」「内面」「発達」を「障害」との関連で捉え直すことは一定進んだように考える。実際的には、各学部での「教育実践カルテ」の作成と吟味を中心にそのことに迫っていった。まだまだ 生徒の実態や課題が十分に捉えきれず、適切な児童生徒の課題が「教育実践カルテ」の中に記入できていない面や、そのため協議も深まりにくいという反省点も出ているが、それぞれの力量を高めるとともに、「教育実践カルテ」の作成と協議を通して、私たちが教師集団として、児童生徒の実態や課題を的確に、障害の十分な理解を深めると

ともに、発達的に、共感的に捉える力をさらに高めていく必要があると考えるものである。「個別の指導計画」がどの学校でも作成されている中、本校が随分以前から「教育実践カルテ」という名称で作成してきた、この資料の持つ意味、それを集団で検討して、ひとりひとりの児童生徒の指導を充実させてきたことの意味を、再度確認し胸に刻んで、次年度もさらに充実をはかっていく必要があると考える。また、「教育実践カルテ」を生徒の実態と課題を年度の早い段階で的確に捉えて協議のもとにそれを深めていくとともに、年度の途中にも生徒の変容を捉えて加筆訂正していけるものとし、指導のさらなる充実あるいは変更も含めて指導を再協議、再確認していけるもの、そして私達の指導の方法や有り様を見直していけるものとして、日常的に活用していけることを一層目指していかなばならないと考える。「教育実践カルテ」のよさを守るに止まらずさらに改良を加え、よりよきものとしていきたい。繰り返しもなるが、中心課題、人格的課題に代表されるように、生徒を丸ごと捉えた実態、その分析に基づいた課題設定を考えることに「教育実践カルテ」は大きな意味を持っており、教師サイドからだけではなく、その生徒の内面からの（生徒側からの）課題や目標（願い、ねらい）を見いだしていくことの重要性も指摘しておきたい。

外に発信していくという点については、研究協議会の実施がその一番の有効な機会であり、その大きな力となったが、それ以外にも、越野先生を講師としてお迎えして実施した 公開研究会も、近隣の特別支援学校からたくさんの方に来ていただき、実に有効な機会となった。隣接する明石養護学校の東川先生に来ていただいた研究会も他校からの参加は0であったが、明石地区の特別支援教育の現状を知り、その中で本校の役割を考える上で有意義な機会となった。

本校の出版本『コミュニケーション的関係がひらく障害児教育』の内容の理解を進めることについては、これまで述べてきたように、研究協議会を節目にしながら、学部研究会の中でも学習を重ねてきた。本の内容の理解は着実に進んでいるように考える。また、これまでの出版にからめた研究会を、「ことば・国語」「集団」「ものづくりと自分づくり」「からだ・性」という4つのテーマ別研究会に移行させて2年目である。テーマ別研究会も、本の内容の吟味や共通理解をはかっていくことうえで意義深い機会であったように考える。今後もさらに理解を進めていきたい。

③点目についても、先にもふれたが研究協議会を節目にして「特別支援教育の現状と課題」について学びを進

めたとともに、越野先生をお招きした公開研究会、東川先生をお招きした全校研究会で学びを進めていくことができた。

次に④点目についてであるが、軽度発達障害の児童生徒の指導については、今年度も中学部では、高機能自閉症の特徴もみられる広汎性発達障害の生徒が在籍したことから、その理解と指導のあり方について、学習もし努力を重ねてきた。高等部でも数学LDや場面緘黙の生徒等、軽度発達障害の生徒の指導について協議を行い、よりよい指導を目指してきた。まだ、取り組みの始めであり課題は山積しているのが実情であるが、「特別支援教育」の中で大きな課題となっている軽度発達障害の指導について、本校でも考える機会、教育実践を行う機会を持ったことは有意義であったように考える。研究協議会がそのいい機会となったように考える。また、軽度発達障害という概念のみならず、広汎性発達障害、自閉症スペクトラムという概念や、その理解、指導のあり方の追求は極めて重要なものとなっている。その意味では、小学部では、自閉症スペクトラムの障害を有すると考えられる児童が6割もおり、その理解と指導について努力をしてきた。それは中学部、高等部においても然りであるが、今後も引き続き、軽度発達障害、広汎性発達障害、高機能自閉症、自閉症スペクトラム等について、全校的に一層学習を積み上げ、共通理解を進め、指導の充実をはかっていきたい。

さて、ここ数年、本校においても、軽度発達障害の児童生徒の教育相談が増えてきている。次年度も中学部に「アスペルガー症候群」の生徒が入学することになった。まさにコミュニケーションの関係を築くことに課題を持っている児童生徒の理解や関係作り、指導のあり方が、現在の障害児教育の大きな課題となっていることを、実感することができる。「コミュニケーションの関係をひらく障害児教育」の創造の大切さを本校はさらに追求していかなければならない。

⑤点目の発達科学部との連携については、後でも触れるが、コラボレーション委員会を経て、研究協議会への協力を中心に連携をもっていくことができた。しかし、日常的な連携という面ではまだまだ不十分な点も多く、今後の課題が多く残っている。私たちが具体的な形で、発達科学部の先生に働きかけていくことが大切であり、具体的な形を考えていくことこそが、本校の研究の充実にもつながっていくように考える。

さて、方針の中でも述べているが、教育を取り巻く情勢、障害児教育を取り巻く情勢、障害児者を取り巻く情勢はまた大きく変わり、まさに激変ともいえる変化であっ

た。教育基本法の改定がなされ、憲法も、改正の手続き法ともいえる国民投票法も制定されることになり、改定の動きが非常に強まっている。その流れの中で、教育3法案も制定された。教育再生の論議が進んでいるが、それは真の意味で再生とは程遠いものであるように私たちは感じており、こどもたちの状況は、不登校問題、いじめ、自殺問題に見られるように、深刻さを増している。教育を取り巻く問題がますます多くなり、教育の荒廃も悲しいかな進んでいる状況である。そしてそんな中、教育の管理統制を強めることでそれに対応しようとする流れが次々と作られてきているようにも感じる。「競争原理」をこれ以上、教育に持ち込むことで教育の再生は望めないであろうし、特別な支援を必要とする発達に遅れのあるこどもたちにとっては、一層困難を強めることになるのではないだろうか考える。それらは、こどもたちに豊かな教育を保障し実現していくうえで全くの逆効果ではないかとも思われる流れであり、私たちの思いと反する動きである。そんな現状だからこそ、本来あるべき「人格の形成をめざす」という教育の意味、価値をあらためて示していく必要性が増しているのではないだろうか。そして「人格形成」を促すうえで、本校の著書で示したように、コミュニケーションの力を培っていくこと、なかでも「コミュニケーション的理性」を育てることの重要性がさらに大きく増しているように考える。なぜなら、現在の教育の問題は、コミュニケーションの力の不十分さ、コミュニケーションの関係を結ぶことの不十分さが大きな要因とも考えられるからである。その不十分さは、児童生徒同士の関係とともに、児童生徒と教師との関係、あるいは教師同士の関係についても痛感されることである。そんな中、「集団」や「自治」の視点の重要性についても同様に大きくなっている。本校のこれまで大切に考えてきたこと、実践してきたことが、今さらに重要性を増していること、それを確認してさらに実践を高めていくことが大切であること、外に発信して真の教育の充実、特別支援教育の充実本校に一翼を担っていかなければならないことを確認して、総括としたい。

5. 研究推進の具体的な内容と方法についての総括

(1) 学部研究会の充実

《テーマ》

〔小学部〕 コミュニケーションを築き始めた子どもの教育をどうつくるか

～自己表現と享受能力を大切にした授業づくり～

〔中学部〕 育とうとする心を、仲間の中で

〔高等部〕豊かな人格発達をめざす高等部教育の創造
～コミュニケーション・自治というキーワード
をもとに「自分づくり」を探る～

詳しい各学部研究のまとめは各学部の報告に譲るが、基本的に毎週1回（木曜日）を学部研究会として保障してきた。ただ、テーマ別研究会を年に3回設定したこともあって、学部研究会の時間は少なくなっていまい、研究を深めるうえで難しい面もあった。しかも研究協議会の実施に向けてやるべきことは多く、運営面での大変さはあった。しかし、限られた回数の中で計画的に学部研究をすすめる、また各学部で適宜自主的に学部研究会を持ち、有意義な研究の機会となった。今年度の到達点そして課題を次年度に生かしていきたい。

(2) 全校研究会の充実

一学期に「公開研究会」という形で2度、そして三学期にまとめの機会として1度、計3度の全校研究会をもった。「公開研究会」が大きな意味を持ったことはすでに記したが、次年度も、有効で適切な機会として「全校研究会」を実施していきたい。

(3) テーマ別研究会の実施

これまで、教科問題別研究会（グループ研究会）として実施してきた研究会を、「テーマ別研究会」と名称を変更し、①ことば・国語、②集団・自治、③ものづくりと自分づくり、④からだ・性、の4つのテーマで、各先生の希望で6～8名の人数構成での研究会を組織して、年間に3回実施した。小中高の教員が混じって学び合う機会というテーマ別研究会は大きな意味を再確認することができ、各研究会が、レポート報告をもとにした協議等、積極的、計画的な運営を行うことができ、非常に有意義な機会となった。

(4) 研究図書の購入、整備

定期購読雑誌や新刊図書は、よりその活用をはかるために、教員室に置く形にしたことで、これまでより活用できている。

(5) 広報活動

研究推進ニュースの発行を中心に広報活動を行った。研究推進ニュースは、月1あるいは月2位のペースで定期発行する方向で考えていたが、残念ながら定期発行はできなかった。年間に13号の発行にとどまってしまったが、副校長の研究協議会実施に向けての企画連載を行うことができた。また、学部研究やテーマ別研究の交流、

研究出張報告、図書の紹介といった内容で発行した。

(6) 研究出張

研究出張のしにくい状況ではあるが、県知養研の小中高の部会に参加することができ、また近知養研の部会にも一部参加することができた。

研究出張旅費については、県知養研等の出席の必要な出張とともに、各教員の希望の学習会等について、研究推進委員会でその扱いについて協議をし、計画的な研究出張予算の執行ができた。どうしても、現状として、夏休み等の長期休業中や、土曜日・日曜日の研究出張が多くなっている。

(7) 研究集録の発行

今年度の研究と実践のまとめ、年次記録として、「研究集録No.34」を刊行する。

(8) 対外的な諸課題

① 発達科学部との連携

発達科学部とのコラボレーション委員会を5月25日（水）に行った。そして、それが、中林稔堯先生に研究協議会の特別分科会を担っていただくこと、木下孝司先生に研究協議会の第1分科会（小学部会）の共同研究者を担っていただくことに結びついた。それらのことが実現できたことは成果として大きい。さらに有意義なコラボレーションのあり方を追求し、実現していくことを目指していきたい。

② 県知養、近知養、教大協などとの連携

近知養研小学部会の兵庫県の責任校の任を担った。

(9) 地域との連携

障害幼児保育教室（たんぼぼ教室）を10回（月1回土曜日）開催した。毎回10軒程度の家族の参加で、参加する幼児（家族）は広がりを見せており、重要な取り組みとなっている。今年度は、のべ117組の参加であった。明石障害児学級担当者会は、毎回参加するところまではできなかったが、参加を心掛けてきて、小学校の担当者会は随分と多く積極的に参加することができた。夏休み中の障害児学級担当者会の研修会にも参加した。

木の根学園との懇談は、今年も夏休み中（8月10日）に行うことができた。

附属明石小学校との交流は、2年生の児童が79名来る形で、2月22日に行うことができた。

三木養護学校との交流は、本校高等部と三木養護中学部の間で6月15日に行うことができた。

6月30日（土）に、「特別支援教育の実践をどうすすめるか～個の課題と集団の課題をどう結びつけるか～」というテーマで、越野和之先生を講師にお招きし、全校研究会をもったが、その研究会を公開研究会としての位置づけにもし、近隣の養護学校から多数の先生に参加していただき、本校以外から15名の参加で、成功裏に終ることができた。近隣の養護学校から多く来ていただいたことはとても大きなことであり、他校からも参加した研究会だからこそ、本校でもより学べた面も多く、今後も、このような取り組みをいい形で実現していくことができたかと考えている。

附属明石中学校の2名の生徒のインターンシップを、11月の5日間、本校で受け入れた。

その他、様々な研究会に講師として招かれて、数名の教員が出向いた。

5. その他

今年度、「学部研究会」と「テーマ別研究会」の両方を行い、また「全校研究会」も持ってきた。そして、それと並行しながら、いやそれを有効に結びつける形で「研究協議会」を実施することができた。次年度は「研究協議会」を実施しない年度にあたっているのので、有効な実施の方法、充実を探っていきたい。

①第1回全校研究会報告

★期 日：5月17日（木）

★時 程：15：20～16：30

★場 所：本校日常生活訓練棟談話室

★テーマ：「明石地域の特別支援教育の現状と課題について」

★講 師：東川先生（明石養護学校特別支援コーディネーター）

◆明石の特別支援教育について、その不十分さや課題も含めて、現状について聞く機会、知る機会を持てたことは有意義だった。隣にありながら明石養護学校の先生の話聞く機会はこれまで殆どなく、その機会を持つことができたことも、意義のある機会だったと考える。また、本校が、明石の特別支援教育の中でどんな力が発揮できるのだろう等を考える機会ともなった。

②第2回全校研究会「公開研究会」報告

★期 日：6月30日（土）

★時 程：13：00～17：00

★場 所：本校日常生活訓練棟談話室

★講 師：越野和之先生（奈良教育大）

★テーマ：「特別支援教育」の実践をどう進めるか。～個の課題と集団の課題をどう結びつけるか～

★内 容：「越野先生の講演」

「本校からの実践報告（問題提起）」

※他校からの参加者 15名

県立神戸特別支援学校3名、さわらび分教室3名、神戸市立青陽高等養護1名、県立播磨特別支援学校1名、県立姫路特別支援学校1名、明石市立沢池小学校1名、明石市立明石養護学校1名、西宮市立北山学園1名、日の本幼稚園（姫路）3名

◆越野先生の講演は、とてもわかりやすく、「生活の質」の話や「親密圏」の話等、とても勉強になり、また私たちに元気を与えてくれるものであった。

◆他校からの参加者が前回の40名から比較すると、15名と非常に減り、残念な面もあるが、15名も参加者があったとも捉えることができる。他校から参加していただくことで、私たちにとって有意義な面も多く、全校研究会以上に学ぶことが多かった。一方、公開研究会であるがゆえに、全校研究会ならもっと本校内で協議できることができにくいという面もあった。そのあたりのより有効な形を今後追求していくことも必要であろう。

◆中学部、高等部から実践報告をしてもらったことは、有意義だった。各学部で大変だった面もあると思われるが、研究を進めていくうえでの有効な節目となったのではないだろうか。ただ、短時間での報告になってしまったこと、協議をすることが不十分に終わってしまったことは、残念だったことである。

（文責 研究推進委員会委員長／松永 芳博）